

〈同志社アーモスト館五〇周年記念式典講演〉

祝 辞

同志社総長 上野直蔵

アーモスト館創立五〇年記念に、アーモスト館に深いご関係のあった方たちが多数お集まりになりました、アーモスト館の過去をふり返り、また今後われらはアーモスト館に何をなすべきかを考えくださいますこの記念すべき意義深い式場におきまして、お祝の言葉を申し述べます機会をお与えくださいましたことを感謝いたします。

アーモスト館がアーモスト大学から同志社に寄贈されてここに五〇年、アーモスト館は五〇歳に達したのでございます。わが同志社の創立者新島襄先生は、四七歳で召天されました。アーモスト館は新島先生の年齢よりもすでに三歳長生きをしているのであります。

ある歴史学者が、歴史は一つの危機に際してもっとも多く顧みられる、と申しまし

た。ここでいう危機とは転換期のことです。同志社アーモスト館の現在の運営状態は、新島タブレット精神にてらしまして、危機に、転換期に遭遇していると申さねばなりません。

ここで私はアーモスト館の五〇年の歴史をできるだけ簡単にふりかえってみたいと思います。まず建築でございますが、一九三二年に建てられたこのアーモスト館の本館、それから三〇年いたしまして、寄贈されましたゲスト・ハウス、さらに第三番目の建物といたしまして、さきほども、皆さま方がそのなかにお入りになり、心の塵を払われました茶室、無賓主庵、これが一九七九年につけ加えられることになりました、アーモスト館という一括した名前でおります建物は、これらの三つの棟であります。

次にアーモスト代表のことに及びたいと思いますが、三五年間その代表であられて、現在アーモスト大学教授、同志社大学教授であられるオーテス・ケリーさんが一九四七年から本日までずっと着任していられます。アーモスト大学代表という資格においてはケリー先生お一人だけが、三五年もの間このアーモスト館にいらっしゃるわけでございます。

それから、この建物が建ちます前に、アーモスト大学学生代表として初代のニコルズさんのご着任は一九二二年であります。このニコルズさんをはじめといたしまして、戦前にはジョン・ホールさんまで十人の方が来られています。

それから戦後になりまして、一九五八年から現在まで、さきほどの席にお立ちになりましたアーモスト同志社フェローのシルバーさんまで、二人の方がいらっしゃいました。そしてこれらの方々はアーモスト館にお住まいを願ったわけでございます。

こんどは寮生のことに移りたいと思いますが、寮生はどの範囲をいうかということになりますと、きわめてむづかしいと思いますが、一九三二年の五月に最初の寮生が入寮いたしました。それ以来一九七八年末まで二九六人の同志社大学の学生が寮生としてこのアーモスト館を出てまいりました。その二九六人のうち戦前の方々が九六名、それから戦後ケーリ先生のいらっしゃいました一九四七年から一九七八年の終わりまでを勘定いたしました二〇〇人、それから現在まで三一人の方を勘定することができます。

この九六人、二〇〇人、そして三一人と三つの節目をつけましたのは、最初の九六人は戦前の方々であり、そしてその次の二〇〇人は戦後でございます、さきほど申し上げましたようにケーリ先生がご着任になって、そして今から四年前の十二月の終わりまでに至りますものが二九六人と勘定した数でございます。九六人と二〇〇人とは、この新島タブレットの精神にてらしまして、もっとも忠実に寮生として終えられた人たちだと思うものでございますが、あとの三一人につきましては、ただいまも申し上げました一九七八年の終わりに、当時の寮生の半数以上のものが残った七名と意見が合わずに出てしまいました。それ以来の勘定で、いま申します者は、いわゆる新島タレット精

神に必ずしも忠実であるとは保証しがたいということです。

このようにアーモスト館の五〇年の運営の歴史を見てまいりましたのでございますが、最初にも申し上げましたように、現在のアーモスト館の運営状態は、新島タブレットの精神にてらしまして、これを四季にたとえますならば、冬の状態であるといわざるをえません。すなわち四季のうちでもっとも寒く、また万物の成長しない状態にたとえねばならないかと思えます。しかし「冬来たりなば春遠からじ」と申します。この冬の状態は、近い将来におきまして必ず春の状態にもちこみますことをお約束申し上げます。て祝辞といたします。

〔本稿は昨年一〇月一六日、同志社アーモスト館五〇周年記念式典での講演に加筆訂正を加えたものである〕



〈同志社アーモスト館五〇周年記念式典講演〉

『
…ブロード・ヴィジョン・アンド…
』

アーモスト大学代表オーテス・ケリー

Otis CARY

アーモスト館は設立以来五〇年がたちました。そのうち私は三五年間にわたって関係してきました。たぶん次のめでたい周期には、私はもうここを離れているのではないかと思いますので、きょうここで私に話をするようにいわれたとき、どうしても受けざるをえなかったわけです。申し上げたいことを二つに分けて、話してみたいと思います。

私は歴史を学んでいる者です。同志社大学でアメリカ史を担当しているわけですが、歴史家は後ろを向いている場合が多いので、前向きになりにくいものです。

ちょっと英語を織り込んで申しわけありませんが、まずシーアブルズ (seabees) の話、おもに建物に関して申し上げます。

じつはこの建物の一番のルーツは一一五年前のことにあります。言うまでもなく新島襄がアーモスト大学に入学した年

です。私のこととの関係はその次の一八六八年、一一四年前からになるわけです。それはその名前をまもられている私の祖父がアーモスト大学に入学し、そこで新島襄を知り、そして日本に興味をもち、日本に来るようになったわけです。皆さんは同志社の歴史をいろいろご存じかと思いますが、ちょうど五〇年前にこのアーモスト館が建てられることになったのは、アーモスト大学の一〇〇年祭、一九二一年の記念行事から出発して、ちょうどアメリカが孤立主義に動きつつある時期に、アーモスト大学では「世界に光を」というモットーをもっているだけに、何か外向けのことをしたらどうかという動きが出てきたわけです。そのアイデアは、オーランド・クラーク博士というすぐれた校友がどうしても国際的なことをひとつやろうではないかということで、アーモスト大学の学生にはたらきかけて、そして学生のほうから、募金してどこか外国に自分たちの代表を送ろうではないかというふうなことになりました。どこへ送るか、ということになると、中近東にある二つの大学、つまりレバノンのベイルート大学とイスタンブールのロバート・カレッジという、ともにアーモスト大学出身者が設立した大学があったわけですけれども、それよりもやはり日本の同志社がよいではないかということになってきまして、クラーク先生と同級生であり、長年同志社の神学部の教授であったE・S・カープ先生を軸にして、アーモストの学生が集めた共同募金の金でもって、初代学生代表のステュワート・バートン・ニコルズさんが二年

間、同志社へ来ることになったわけです。

ご存じのようにニコルズさんは非常にうけがよかった人で、またたいへんよく奮闘しました。室町の聖山寮に六人ばかりの学生といっしょに住んだと聞いております。ニコルズさんは二年間の任務を終えて帰国し、日本への宣教師になるつもりでニューヨークのユニオン神学校に進んだのですが、胸の病気が進み、一年ばかりでこの世を去ったわけです。しかし同志社では非常に評判がよく、同志社はその後任の派遣をアーモストに申し出ました。アーモスト大学はその要望にこたえて太平洋戦争に突入するまでに、あと九人の学生代表を次々に派遣して参りました。

ニコルズ家はアメリカの中西部でいろいろ事業をおこなっておりました。ニコルズ氏のご両親、とくにお母さんは、自分の息子の後任がもつとまじな住居に住むことができるように、二万五〇〇〇ドルをアーモスト大学に寄付いたしました。ちょうど大正の末期、昭和の初めのころであります。

ご存じのように世界の大不況がそのころ発展しつつありました。アーモストではこれにどう対処したらいいか、なかなか名案もなく、当時の理事長は、いつまでもいたいだいた金をねかしておくのはいけないということで、自分も同じく二万五〇〇〇ドルを寄付するから、一年以内に募金を完成して、やるべきことをやるか、でなければニコルズ家のほうに二万五〇〇〇ドルを返すべきであると、こういうふうにハッパをかけたのです。それで大恐慌のさなかにもかかわらず、アー

モストのほうで募金をして、あちらこちらいろんなところから集めて、合計約六万ドルの金ができたわけです。そこでアーモストは同志社に手紙を送り、アーモストの学生代表が住む建物を寄付したいのだが、案を考えてほしいと申入れました。それに対して同志社は、ちょっと質素な、昔の古い方の此春寮のような図面をアーモスト大学に送ったわけです。アーモスト大学のほうでは、これも結構だろうが、やはりアーモストのすばらしい記念になることだし、それに新島がアーモストからうけ継いだ精神を継承できるような、そういうものであるべきだ、と考えました。それでアーモスト大学にあるフラタニティ・ハウスの建物の絵を同志社に送ってきたわけです。同志社のほうではこういうものを建てたいのかということ、それをヴォーリズ建築事務所に持っていきまして。ちやうどそういう西洋建築の研究を終えて帰ってきた技師がおりまして、ニューイングランド・ジョージアン・スタイルの立派な図面を得意になって書いてくれたわけです。清水建設が建築を請負いまして、建物としてのアーモスト館が完成したのが一九三二年でありました。

さて、アーモストの学生代表がニコルズさんから数えて十人やって参りましたが、戦前の最後の代表は、さきほどちょっと顔を出された、イエール大学のジョン・W・ホール教授で、ホール先生はここに住んだ戦前の五人の最後の代表でした。ちやうど日米の戦いが始まる直前のいちばん最後の船で帰ることができました。

同志社のほうでは、どういふふうに保存していくかということ、いろいろ心配しました。敵国からの寄付でできた建物であるというので海軍病院として接収する話まで出たそうです。ほとんど強制的な金属供出が行われた中で、同志社の配慮のおかげでアーモスト館の二つのタブレットは供出を免れました。すなわち玄関のニコルズ・タブレットの上には、掲示板が作られました。このホールの新島タブレットの上には、文部大臣荒木貞夫大将のちよつと勇ましい揮毫をかけたということ、一、二階を使うことになりました。廊下の板を傷めないように、別の板をその上にはるほどの気遣いふりをされました。三階は同志社大学研究所の個人研究室として使われておりました。

太平洋戦争が終りますと、日本の精神的な復興を助けるためにアーモスト大学は何をすべきか、ということが真剣に考えられました。結局、同志社との結びつきを大切にすべきだということにきまり、私がアーモスト大学の代表として同志社に派遣されることになりました。私の前任者たちはすべて学生代表でしたが、私はアーモストの理事会、教授会、校友、学生をすべて代表するかたちで送られているのであります。私は一九四七年秋に家内と一緒に到着しました。それから三五年になります。アーモスト館の寮は一九四八年に再開されました。

一九五三年にはじめて現役のアーモスト大学の総長がこち

らを訪問いたしました。日本に六週間滞在し、北海道から東京、関西地方をくわしく見てまわりました。各地で学術講演もしました。そのチャールズ・W・コール総長は、私の尊敬している人であり、私を同志社に送ることをきめてくれた人でありました。そのコール総長とはいろいろなことを話し合ってきました。私はそのころ四人目の子供ができたときでありました。それで本館二階の代表の三室と、もう一室いただいております。コール総長は、おまえそんなこといいのか、女の子が三人もあって、女を男子の寮に入れていてほしい、うぶなのか、と聞かれました。そんなことは考えたこともなかったのですけれども。とにかく男子寮にいつまでも三人の女の子を置いていてはいけないというわけで、あちらこちらに働きかけて新しい住まいのことを考えはじめてくださったのです。当時は本館の向こうにテニスコート、そのまた向こうに此春寮がありました。はじめは新しい建物を本館とT字型にして、新聞室から東に進んで、一階は食堂、二階、三階は代表の家族が住めるようなところという考え方だったのですけれども、だんだんそれが進化してゲスト・ハウスがあったほうがいいじゃないかということになり、それで当時の秦孝治郎理事長のたいへんな努力でゲスト・ハウス案に落ち着いたようなわけです。二万五〇〇〇ドルという最初の寄付をくださったのは、先日なくなつたジョン・D・ロックフェラー三世でありました。その上、当時のアーモスト大学理事長だったジョン・J・マックロイさんからも五〇〇〇ドルを頂

きました。ゲスト・ハウスは土地の取得のことで難儀しまして、とうとう此春寮の建物を北小松の土地に移し、そこをあけて頂き、そこに建つたのが、最初の寄付をいただいでから五年のちの一九六二年でありました。こうしてゲスト・ルームと食堂ができたのですが、もともとアーモスト館は意識的に食堂なしに建てたわけです。つまり当時のアーモスト大学の学生はよく外食屋に通い、その行き帰りの話し合いや歌が非常によかつたので、やはりそういうことを期待しようということで、この館に食堂をつくらなかつたわけですけれども、時代がかわり、ゲストとのつきあひもあり、食堂を一階におき、ゲスト・ルームを二階におき、その東に私たちの住居をたてて頂いたわけです。なお一九五三年のコール総長の日本訪問の副産物は、アーモスト大学に日本向けの二つの奨学金、すなわち新島奨学金と内村奨学金が作られたことです。日本でコール先生は新島はもちろん内村の影響力の偉大さに感銘を受けたのでありまして、二人を記念して……と提案したら、持って帰ってア大の理事会でおしとおしたのです。又その何人かのスカラズが今日出席してくれています。

つづいて、さきほど上野総長も言われましたように、三年前に無賓主庵という、文化財的な茶室が与えられました。これはきょうも出席していただいでおる私のいちばん最初の学生の一人のおじいさんがお茶に非常によつておられて、飛弾の国にあった合掌造りがつぶれてから、その材料をもつてきて、茶室を今熊野のお宅に建てられたのです。そこには非常

にきれいな谷間があり、向こう側にいくつか御陵があったりして、茶室にはもってこいの風景の所にあったのですけれども、歴史の流れをのんでそこに新幹線を通すことになり、せっかくの茶室はちよつと意味がなくなってきたようなことから、ちょうど同志社の一〇〇周年の募金が終わりがかったところで、同志社とアーモスト館に寄付してくださることになりました。今熊野からそのまま移築することになったわけです。

皆さんのほうがお茶にくわしいでしょうが、どうも芝生の向こうの側で、すわりがいいという言葉があつているのじゃないかと思ひます。もう三年目ですが、あと二年くらいたしますと、あそこで新島先生がお茶を飲んだんだということになるのじゃないかと思ひます（笑）。その後五年くらいたしますと、あそこで新島先生が生まれたのだ（笑）。歴史はそれを証明しませんけれども、たぶんあれは新島先生の郷里から持ってきたものだから、なにかそういう神話もできそうな感じがします。この三つの建物はみなシアブルズであります。

また館のお世話してくださっている中野夫妻も、ここで二〇年余り面倒を見て下さり、その前の岡部夫妻も、同様にずっと館を大事にして下さった方々で、大いにシアブルズに入ります。

また同志社のほうではコール総長はじめ、プリンプトン総長、ウォード総長、そして今のギブス総長にいたるまで、

現役の総長を招いて頂き、名誉学位を与えられました。来月また、アーモスト大学の副学長が来訪いたしますけれども、こういうものもまたシアブルズに属します。さきにふれた新島、内村スカラシップもそれであり、新島スカラはいま十五人目が留学中です。またさきほど総長が申されたように、アーモスト・同志社フェローは今二二人目のシルヴァー君がきております。また同志社側から創立一〇〇周年を記念して、アーモスト大学で同志社の教職員が在外研究できる制度が設けられました。またアーモスト大学代表としての私もシアブルな存在であります。——このように、シアブルズのほうが話しやすいのですけれども、第二部に移りましてアンシアブルズ（uneasiness）のほうをいくらか申し上げてみたいと思ひます。

私たちは一四年間この建物のなかに住み、ずっと寮生諸君とつきあってきました。四年前までは寮としての建設的な、また教育的なプログラムがありまして、いろいろな行事に寮生が自主的に取組んできたわけです。ナイト・サービスというものが、大体夜の十時がふつうでしたが、寮生は交互に聖書に基づいて感話を述べ、宗教的な真理を求める機会を作りました。寮生はクリスチャンばかりではありませんでしたが、やはり新島の精神をひくアーモスト館である以上、ナイト・サービスは重視いたしました。さらに読書会、勉強会も開かれるようになりました。いちばん盛んなころには四組の勉強会があり、私はそのうちの二組を引き受けていて、他

の二組は卒業した先輩たちが担当してくれました。こういうプログラムで何年もつづきました。それにつづいて、どうもケリーとつきあっているうちに英語が上達しないという批判の声がありまして、そのために、一九五七年以降アーモスト大学に「アーモスト・同志社フェロー」を派遣するようになり、モーニング・ブラクティスをやるということになり、朝の一分間を英語の練習にあてることになりました。その出席はだいたい凸凹がありましたけれども、大体において英語力をかなりつける結果となった寮生もいたわけです。

また体を鍛えなければならないということで、土曜の朝にはよくソフトボールを御所にやりに行きました。朝めし前です。そればかりやるのも結構だが、その辺中野さんを手伝って庭掃除も少し奉仕しようじゃないかということで、長い間、あるときはソフトボール、あるときは庭掃除という風に、ずっと続けて参りました。なつかしい思い出であります——私もよくピッチャーをやらせてもらっただけに、

一三年前に学園紛争が起きて、同志社も五か月間ほど足ふみしたことでありました。ちょうどアーモスト大学のほうでもヴェトナム戦争反対の運動がありまして、アーモスト大学ではモラトリウムといって、先生も授業を中止して反省会を開いたりしました。アーモスト館でそれを私が提案したところ、こちらでもやることになって、アーモスト館の生活をいちいちはどういてみて、プラス・マイナスを測ってみたところ、

ろ、そのモラトリウムが終わってからまた全部をもとどおりに続けるということになったわけです。それぞれの行事が寮生のほうからの提案であり、それを実施の方向へもって行くようになったことを非常に誇りに思います。

もう一つ、自然にでき上がってきて、それを発展させたものがニックネームの制度であります。先輩、後輩、上級生、下級生というふうなことが人間関係に歪みを作りやすいので、ここではいっさい上下関係をなくしてつきあうということで、いろんなニックネームでたがいに呼び合うことになったわけです。どうしてもニックネームに「さん」をつけて呼ぶ下級生が出てきましたので、一〇年ぐらいたつと、上級生のほうから、これ以上絶対「さん」はつけないでくれと下級生に寮会でたのんだことがありました。それはあの時期の一つの正しい精神だったのじゃないかと思えます。

当時なんとなしに私がちょっとつくって見た言葉があります。それは主人制ということ。はたしてそんな言葉があるのかどうかわかりませんが、アーモスト館にはあります。つまり私だけをこの主人にもってきやすいわけで、私はそれがいいふんいやで、この二〇名の寮生が私と同じくこの主人なのであって、みんながこの主人であるという、そういう団体生活でなく共同生活を強調しようと努力したわけです。

しかしこれはアンシーアブルズであり、目に見えないことが多くて、ちょっと見えてくることもあります。そのころは

ちょうど新館建設のために大募金をしようとなりました。われわれとしてはあまり力がなかったわけですが、当時五〇〇万円を目標にかかげ、三〇〇万円ほどにこぎつきました。ここにおられる木下先輩にそういう方面で非常にご厄介になったわけです。

さきほど述べましたようにここで四人の子供にめぐまれ、彼らは非常にありがたい環境で育っていったのですが、日本の小学校から神戸のカナディアン・アカデミーに進み、さらにアメリカの大学に入りました。

大学紛争後いろいろなことが私の身に起こり、あまり嬉しくない言葉も聞かされるようになったわけですが、ある人からは、どうもアーモスト館は東西にまたがっているため、その間にはまってしまっ、シレンマにおちいり、「ここは悪魔の屋敷である」と、一晚にわたってお叱りをうけたことがあります。どうしてもその言葉は私の耳からぬけないのです。もう一つ、九年前のことですけれども、どういうことから知りませんが、私を相手どって、「おまえの生活をめっちゃめちゃにしてみせる」という言葉をいただいたことがあります。またもう一つ、いまのこういう状況になってしまっってからですけれども、「ここまでいろんなことができたのですから、もうこれでいいではないですか、これ以上もっ」と何をしろとおっしゃるのですか。」この三つの言葉はどうしても私の耳から消えません。

数年前のことですが、アーモスト館に一年以上住んだ人は

新聞室に行ったら寂しい思いをするのじゃないか、なぜならアーモスト大学出身者で、同志社で教えたことのある人々の写真を掲げていたのです。それからまた実際に誇るべき日本人の卒業生、内村鑑三、樺山愛輔、神田乃武といった人たちの写真がそこに全部掲げてあったわけです。ある朝それが全部そっくりなくなっていました。どういいたずらだったのか、どういことだったのか、私にはわかりませんけれども、それがどこかの古道具屋にあらわれてくることを願っているわけです。そういういたずら、そういうことを謀る発想というものは私にはなかなかわかりませんでした。いまだにわかりません。どうもそういうアンシーアブルズもだいぶあるわけです。

そろそろ終わらなければならぬのは十分わかっております。私の主題は「ブロード・ヴィジョン・アンド……」というように、出しておいなのですが、これはもちろんさきほどのニコルズ・タブレットの中にある言葉です。これは、「アンド・フレンドシップ」とつづきます。私もこれで五〇年のうちの三五年つきあってきたわけです。おなかも出てきてお叱りをうけるわけですけれども、そして週一ぺんくらいテニスを家内とやったところであまり減りませんが（笑）、三二年前に私この部屋で泣いたことがあるのです。というのは、当時の湯浅総長に誘われて、ちょうど開校しようとしていた、国際キリスト教大学のほうにいっしょに行かないかということで、家内がICUの校医になる、私がその教務部長

か何かなるということだったのです。それで私せっかくこの三年間て出発したところの何もかもを置いていかなければならないということで、この部屋で厩上げされてアーモスト館を去るのが悲しくなったことがあります。

ちょっとさかのぼってみますと、こちらに来ることになったのは、一四年前の祖父が新潟と知り合ったことからですが、じっさい直接の理由は、一九四五年八月十六日付の手紙をいただいてからなんです。それはこの建物にはじめて住んだ Trotter 氏からの手紙で、当時 Trotter 先生はアーモスト大学のチャプレンをつとめていたわけです。その手紙はいまだに保存していますけれども、おまえはたぶん日本に派遣されることになるだろう。同志社を訪ねなさい。そして同志社としてアーモストとの関係を持ち直したいならば、それを手紙に書いて、アーモスト大学に送るようにすすめなさい、といった文面でした。それで私は一九四五年十二月だったかと思うのですが、軍服のまま京都を訪れました。さっそく学生を同志社のチャペルに集めて、私の戦争の経験談を一時間余り語れということで、日本軍の捕虜の話をはじめてまとめてしたわけです。それが終わってから、こちらの総長室にやってきました。そういうふうな手紙を書く気持ちがあるならば、いつでも私はそれを受けて、伝令の役を果たしますということ約束しました。東京に戻った後、忘れた頃に、奥村龍三さんと山田貞夫科長さんがわざわざ届けてくれました。それをアーモスト大学に送りました。ちょうどキ

ング総長が辞めるところで、次のコール総長は同志社との関係をどうするかということで、事が始まったのです。その段階ではなにも私がということではなかったのですが、いよいよ私ということになって、固い決心の上で私たち夫婦が派遣されてきたのです。

それ以後三五年がたちました。その後アーモスト大学へ二回帰って日本文化、日本歴史を教えたわけでありますけれども、給料はずっとアーモスト大学から出ていました。ところが五、六年前から、私の給料を同志社も負担しようということになりました、いろいろ考えたあげく、ちょうど半々にしたらどうか、アーモスト館会計の収支の不足額はゲスト・ハウスができて以来アーモストと同志社が折半して負担していますので、私の給料も半々で頂くことになりました。いまの円安ドル高で泣いていいのか、笑っていいのかわからないようになっちゃったのです(笑)。同じくアーモスト同志社フェローも半々の負担になりました。

「プロード・ヴィジョン・アンド……」ということですが、けれども、私は年を取ってきたせいか、プライドということはこのごろの大学生はどう考えているのだろうかということをしよっちゃうと思うのです。英語にはレジティメット・プライドという言葉がありますが、これはあってもいい誇りというふうに取っておきます。ときどき日本の大学生に何にプライドを感じるかということを聞きますが、ちょっとした答ええいただきにくいような次第です。なにカプライヴァシーとい

うものいたいへんプライドをもってみたりしているようで、これはレジティメット・プライドではないと私は思うのです。

かつてこのアーモスト館は同志社の応接間であり、この部屋でよく理事会をやったこともあれば、結婚式もやったことがあります。講演会やセミナー、追悼会や、いろんな記念会をやったこともあります。同志社はいろいろとよく利用して下さり、プライドをもってずっとここを見守ってきたわけです。最近はいろんなりっぱな建物ができております。また町には学生アパートにも非常に豪華なものがたくさんあります。しかしながら私はやはりアーモスト館のこの組み合わせに独得なものを感じるのです。つまり、日本文化のかおりのする無賓主庵があること。なおりっぱな食堂があることです。皆さんのお手もとに配ったところの、だいぶ古いですけれども、三〇年間にいろんな人がここを訪れたことを示すサイン集ですが、そういう形のつきあいのできる、こういう食堂があり、ゲスト・ルームがあり、それに本館があります。これ以上精神的に豊かな共同生活のできるところは、ほかの大学にはないのじゃないかと私は思うのであります。

私の三五年の経験で教訓と考えている、一種の結論は、シアブルなものの方がアンシアブルなものよりもつくりやすいということです。アーモスト館の五〇年のうち三五年間つきあわせてもらって、点に直せば七〇点でちょうどいいところかもしれません。七〇点ぐらいではたして合

格かどうかわかりませんが、私の昔学んだアーモスト大学では、七〇点台のことを「ジュエントルマンC」と呼んでいました。まあ、そのあたりがいいところでありましょう。要するにシアブルのほうがアンシアブルより作りやすいということ。このことを三五年という歳月を通して学ばせてもらったと信じています。

どうも有難うございました。(拍手)

(大学文学部教授)

本稿は、昨年一〇月一六日、アーモスト館で同志社アーモスト館五〇周年記念式典に行われた講演に加筆、訂正を加えたものである

